

第一五回伊豆文学賞応募作品

(S F) ある海洋生物の自我

まばゆい海面から光が無数の束となって揺らめきながら水中に差し込んでいた。その光の乱舞の中に海洋生物が悶えていた。苦痛に身を震わせるたびに灰色の滑らかな皮膚の上で光の斑紋が飛び散った。海洋生物は生長した雌で、出産中であつた。数度の出産経験があつたのだが、今回の出産はなにか異常があり、胎児は産道で留まつた。母体の下部から小さな尾びれが突き出してゐた。活発に蠕動していた尾びれも徐々に弱まり、ついにだらりと垂れ下がつてしまつた。周辺の海中に数頭の雌の仲間が心配気に見守つていた。仲間の出産に立会い補佐する産婆役だ。

この海洋生物は常にひとつの集団として行動する。

母体は最後の力を振り絞つて体を大きく捻つた。だが、力尽き諦め、白い腹部を海面に向け仰向けになつた。

産婆の頭がすばやく泳ぎ寄り、突き出した胎児の尾びれをくわえ、激しく引いた。

鮮血が迸つた。

小さな血の雲の中から嬰兒の全貌が現われた。瀕死の嬰兒は泳ぐ術を知らず、海底へ沈んでいった。産婆たちが一斉に嬰兒に近寄り、下から支え海面へと押し上げた。嬰兒は呼吸孔が海上の空気に触れると本能的に空気を吸い込んだ。

溺れる仲間を海面に押し上げようとするのはこの海洋生物の習性だ。彼らは数分間隔で大気を呼吸しなければ溺れてしまう。

しばらく海面に浮遊してゐた嬰兒が泳ぎ始めた。水中に潜り、母体の腹部の乳房を探つた。

この海洋生物は哺乳動物であり、かつて陸上に生息してゐたが、海に還つた種だ。

嬰兒の頭部は瘤のように異常に肥大してゐた。これが産道を塞ぎ、出産に支障をきたしたのだ。

ジャックは手を借りて船上上がった。船上の人々の賞賛とは別に、不満だった。正式な潜水ではなく、トレーニングのための潜水ではあったが、その日ジャックはかなり本腰で潜った。伊豆半島南端沖合い神子元島付近の、七〇メートルの深度が分かっている海底の根に、あと数メートルの差で届かなかった。

一九六六年ジャック・マイヨールが深度六〇メートルの記録を打ち立ててから、閉息潜水の分野で世界的な深度記録競争が行われた。競争相手のイタリア人が八七メートルに達したが、浮上中にブラックアウト（失神）した。命は取り留めたが、それが限界と悟って引退した。ジャックは記録更新だけでなく、人間の生理的限界を見極めようと、ジャックはメイトルを目指してさまざまな訓練を繰り返した。ジャックが独特の潜水法を学んだのは、マイアミでの水族館勤務中に出会った海洋生物の雌からであった。さらにマイヨールはヨガや瞑想をも取り入れ、人間の生理限界の拡張を精神面からこころみた。ジャックが伊豆半島最南端、下流（シタル）の民宿に度々逗留したのは、この生命に富んだ海域が気に入ったからだ。だが、民宿の女将が魅力的な海女であったからでもある。ジャックは伊豆の海女からも学ぶことが多い。神子元島での潜水に失望したあと、ジャックは落ち込んだ。次々に他者によって塗り替えられていく記録、生理学的な実験、事故の危険性、さまざまに心配の種がジャックの心を重くした。台風が接近して海が荒れた数日間、ジャックは近隣の人間の禅寺、海蔵寺を訪れた。座禅するジャックの沈鬱な表情を眺めて、禅僧は微笑しながらこ

ドント・シンク。
ドント・シンク。

Don't sink.

潜るな。

ジャックには最初そう聞こえた。だがすぐに、
Don't think.だと理解した。

考えるな。

考えるな。

メートルを越えていたろう。深さのことは考えずに、顔面を上に向け、浮上を始めた。ゆつくりと光が増し、はるか頭上に海面のきらめきが見えてきた。大きな回遊魚が数匹、銀色の腹を見せて眼前を横切った。海面に出た。空気を激しく吸い込むと同時に、無意識だった意識が閃光のように甦った。計り知れない歓喜が、ジャックの身体の全細胞に漲った。

ああ、世界はなんと完璧な調和に満ちているのだ！

うっとり海面に漂うジャックの耳に、波が、ランボオの詩の節を囁いた。

見つけた。

なにを？

永遠。

それは、太陽と調和する海。

一八七三年、オーストリアハンガリー帝国の首都ウィーンで万国博覧会が開催された。日本国が正式に参加。日本庭園つきの日本館が特設された。菊花の文様のカーテンをくぐって真っ先に人目を驚かすのは、名古屋の巨大な金鯱だ。さらに源頼朝の太刀など国宝級の品から日常雑貨にいたるまで日本独特の美術工芸品が展示されていた。ジャポニスムがもはやされた時期であり、多くの見物者を集めた。日本館の一隅で、期間を区切ってさまざまな実演が催された。いま、蒔絵の文様が上に行われていた。乾燥させてから木炭で磨き上げるのだ。毎日、その繊細な工程を熱心に見入る一人の赤毛の紳士がいた。数日ひとりの頭を掻くばかりで、最後は身振り手振りの質問となつた。職人は頭を掻くばかりで、困り果てていた。つた。どうしたのですか？

「この柄な日本人が立って。職人はほっとして声の主を見た。口髭を蓄え、この柄な日本人が立って。職人はほっとして声の主を見た。口髭を蓄

粒 ガラス面の微細な凹凸が背後からの燭光を屈折させ、細かい光の

その光の波の中に、一頭の海洋生物がいた。

金と銀細工のレリーフで、躍り上がるように水面に立ち、その肥
大した頭部にひとり少女を乗せていた。少女は裸体で、うつぶせ
の格好で頭部にしがみつき、長い髪を波に漂わせていた。地
中海沿岸に伝わる伝説をモチーフにした長い交渉の末、買い求めた。
忠七はそのガラス皿をカスパーとの長い交渉の末、買い求めた。
マルセユから七年、一年半のりヨンの伝習使命を終え、忠七は
にあつた。ウィーン博覧会の展示を終えて返還される一九二箱の積荷が
乗客のほとんどの犠牲者となつた。遭い、ニール号は難破し、乗員
乗客のほとんどの犠牲者となつた。遭い、ニール号は難破し、乗員
名古屋城の金鯨は大きすぎて別便として運送されたために難を逃れ
た。展示品の返還目録外で、忠七の私物として持ち帰つたボヘミアガラ
スの大皿の存在は誰も知らず、海底に眠つたままである。

洋生伊豆半島南端にある水族館、下田マリントレークのホールで、海
げ沸いた。六番目はボイルを跳ね上げた。そのたびに観覧席から拍
が沸いた。六番目はボイルを跳ね上げた。そのたびに観覧席から拍
たボイルを三回分にボイルを投げた。観覧席からどつと歓声と拍手
座、鼻先でくると回して見せた。観覧席からどつと歓声と拍手
て、鼻先でくると回して見せた。観覧席からどつと歓声と拍手
が挙げた。観覧席は階段状になつて前に行くほど下がり、最先端は
ルの水面よりかなり下になつて前に行くほど下がり、最先端は
の透明な厚いパネルで仕切られていた。最前列の真正面は海面
シヨールを観覧者のは場所は悪いが、よく見える。後方の高い席に陣取
え。観覧者の大半はシヨールを観覧者のは場所は悪いが、よく見える。後
いた。観覧者の大半はシヨールを観覧者のは場所は悪いが、よく見える。後

る男が下部の最前列に座り、前かがみになって、水中を覗き込んでい
る男はショーには全く関心を示さないのに、午前中のショーのあと、
午後のショーにも姿を現した後も、同じ席でじっとプールの水中を見続け
ていた。ショーが終わった後、男は一人だけ残って座っていた。水
中を観察していた午前と午後、二回のショーに姿を現し、同じ場所
で、ショーの花形の女性トレーナーはプール上に張り出した高い台の上
ついで、はじめの日の午後、トレーナーは終わって、ふとその男に見覚えがあるよう
に思いつて、トレーナーは男に近づいた。大
柄な身体を夏にふさわしく、長袖ワイシャツで包み、まくった袖
から日焼けをした腕が覗いていた。近づいたトレーナーは男を思い出し、声を
両手にあげた。海生物たちをまだ眺めていた。トレーナーは男を思い出し、声を
かけた。先生、関口健児先生ではありませんか」
「男は自分の名前を呼ばれて初めて返ったように顔を上げ、誰
だ、沢井亜季です。大学の海洋生態学のセミナーでお世話になりま
した。」
「ああ、沢井君ね、思い出したよ。そのすばらしい容姿は忘れ難
いからね。母の実家がここ近くで、この時から夏休みはよく来
ました。海生物にはじめて触ったのも、この水族館。子供のとき
私、自閉症気味で人とコミュニケーションが出来なくて。効果があ
るかもしれない。いまは母に、このプログラムを実施する側ですけれど」
「でも調教師に就くのは非常な狭き門、と聞いたけど」
「叔父がこの会社で、私も君はダイビングが得意で、学生たちが夕
ンク背負って潜るところでもフリーダイビングで平気で潜っていたよ
ね。しかも観察はソットスーッと着ない裸同然だったから、男子学生た
ちは魚の観察を教わったから、みんな君の後を追ったよ。祖母が海
女で、おばあちゃんにはマイヨールと潜ったことあるんで。伊
豆が、おばあちゃんにはマイヨールと潜ったことあるんで。伊
もマイヨールと潜ったことあるんで。伊

「須崎・田ノ浦の、大学の海洋資源研究所でね、夏は学生を連れ

な通信手段があるはずだ」

講義の流儀だ。自閉症でコミュニケーション欠陥人間だった亜季は、待ちきれずに聞く。

「どんな？」

「・科学者のいうことではないかもしれないが、テレパシーかな。個別の意識ではなく、群としての意識のようだがあつて、瞬時にその意識を共有する」

「いきなりアタックされるのか、だとしても、大きな群全体が瞬間に同じタイミングで同じ方向に動くでしょう。まるで、群れ全体がひとつとつきの生き物のようにはないし、リーダーが存在して命令出すとも思えませんがね。やはり、水のテレパシーでしょうか」

「水のテレパシー、か、いいね。今度書く本のタイトルにしよう。やあ、長話して仕事の邪魔をしてみました。引き揚げる前に本当のことをおう。私をここに二日も惹きつけた最大の理由・それは君だよ。こんな美しい海洋生物は珍しいからね」

「わっはは」

「関口は日焼けした顔に真っ白な歯をみせて豪快に笑ったあと、ひどく真面目な顔になった。尻尾が千切れていて、頭部がほかの個体よりずっと肥大したのがいるだろう」

「ああ、デコちゃん。おでこが大きいから」

「このプールの海洋生物が群れとしての見事な行動を示したことをいままで話したが、あいつだけは別行動だった。仲間が高速で動き回っているときに、邪魔にならないように壁際にはりつき、仲間を助走を開始する。あいつだけが連携した群れ全体の意識から離れ、独自に判断して行動しているように思えてならないのだ。二日間ここでショーを観察した結論だ。つまり、水のテレパシー理論があればそこは適用できないのだけれども、ちよつと簡単な実験をさせてもらえないだろうか」

「水族館閉館後でいいのだが、暗くなつてから一時間ほど、この」

プールの鏡を入れてみたい」
の叔父に許可をもらっておきますが、そのときでよかったら、管理者
簡単な実験だから、許可は問題ないでしょう」

5

素潜りではだれにも負けない自信を持つようになった高校生の沢
井亜季が、例年のように祖母の民宿の手伝いも兼ね、伊豆で夏休み
を過ごした。石廊崎・蓑掛岩付近の海中一〇メートルの水深で、ふと背後に何
かを感じて振り返った。数頭の海洋生物が亜季と距離を置いて浮遊して
いた。鋭い歯がみえたと、彼は危険な生物ではないという事は知っ
ていたし、子供のとくにふれあいプログラムで触ったホットケーキ
のような感触も覚えていた。亜季はそっと彼らに近づいた。丸
い小さな目が好奇心にあふれて亜季をみていた。

そのとき、親しい感情が海中を伝播して放射されたように感じた。
懐かしさで胸が一杯になり、抱擁しようとして頭が近づいた。頭が
代表するかのようになり、亜季の頭部を口吻で軽くつついた。亜
季は自慢の長い髪を大雑把に結わえて潜水していたのだが、つつか
れた拍子に髪が解けて広がった。海洋生物は海藻のように揺れる黒
髪に口吻を入れて、その感触を楽しんでいるようだった。
潜水時間の限界が来ても、苦しい、という意識がほとんどなかつ
たが、髪を海洋生物に愛撫されたまま、亜季は海面にゆつくりと浮
上した。青い空がマスク越しに見えてきたとき、海洋生物たちは
つの間にか消えていた。仰向けに海面に浮遊した。太陽の光が顔
面に降り注いだ。亜季はいつの間にか泣いている自分に気がついた。

私は一人ではないのだ。
この世界はみな、いっしょなのだ。

それが以来、他者を受け入れる寛大さと、海について専門的に学ぶ
決意が亜季に生まれた。男友達に誘われて御蔵島の地付きの海洋生物
をみにいった。エンジン船で探し、数頭の群れに遭遇した。亜季はな
ちは飛び込んで接触したが、あの伊豆での最初の出会いの感動はな

水族館裏に停めておいたピックアップトラックにマジックミラーの積み込み終わって、関口はふと、沢井亜季にきちんと札をいうのを怠ったことを思い出し、ふたたび通用口から館内に入った。膨大なプールの水中ライトは点灯したままだった。プールを満たす膨大な水が、巨大な照明器具のように、夜の闇の底で輝いていた。

そこに、泳ぐ姿がふたつあった。

沢井亜季がああ海洋生物と戯れていた。解き放った豊かな黒髪が海藻のように広がっていた。海は生物が、揺れる黒髪を口吻で弄んでいた。亜季は生まれたままの、うつくしい裸だった。たがいに愛撫するようになり、抱きあい、水に身をゆだねていた。光が祝福するようになり、ふたつの姿を包んでいた。

関口は呆然と神話のような光景を眺め、こう呟いた。

そうだ、愛は、自我の存在の上に成り立つのだ。

翌朝六時に、朝当番で最初に出勤した水族館の館員は、大プールで沢井亜季の遺体を発見した。そのあと携帯のカメラで数枚の写真を撮った。携帯電話で警察へ通報し、そのあと携帯のカメラで数枚の写真を撮った。ただちにやってきた下田警察署の警官は、その写真を見て仰天した。プールの中で、一頭の海洋生物が頭部で亜季の全裸の身体を水面に持ち上げ、泳いでいた。海洋生物は助っ人がきたとでもいうように、館員が写真を撮ったあと、海洋生物は助っ人がきたとでもいうように、亜季は溺死だった。死亡時刻は昨夜九時と推定された。

「参考人として、昨夜八時ごろまでこのプールで沢井さんとごいっしよだったはずですが」
「警察官の事情聴取に、関口は昨夜の実験のことを手短かに説明した。実験が終わって沢井亜季と別れたとき、亜季はプールに放した海洋生物を飼育水槽にもどす作業をしていたと話した。残った一頭の海洋生物と全裸で泳いでいたことは話さなかった。警察としては亜季が全裸であることに疑問を抱いていたからだ。警察としては亜季が「先生、海洋生物学の権威でいらっしやるからお聞きしますが、

この海洋生物は人を襲ったりすることはないのですか」

「一般に野生のこの系統の海洋生物に人が襲われたという記録はありません。しかし飼育されたケースですが、アメリカ、フロリダ州のシーワールドという有名な水族館で、この海洋生物がショーの直前に、観客の前で女性調教師の腰を噛んでプールに引きずり込み、溺死させたことがあります。その海洋生物にしてみれば、ちよつとした戯れだったかもしれません」

「まあ人間でないから、殺意の立証はもともと困難です」

「じつはその海洋生物には奇怪な前科があるのです」

「あの事件は世界中に報道され、海洋生物学者の間で論議が沸騰していましたから忘れません。しかも、今回の沢井さんの事件と酷似しているのです」

「詳しくご説明いただけませんか？」

「一九九九年に男性の裸の死体が、明け方、当水族館のプールで発見されました。例の海洋生物が死んだ男の身体を水面から支えていたそうです。男は身元不明の浮浪者。プールサイドに酒瓶が転がっていたので、水族館に深夜忍び込み、酔っぱらってプールの海洋生物をからかっていて落ちたか、引きずり込まれたか、そこは分かりません」

「どうしてこの海洋生物は溺れた人間を持ち上げるのですかね？」

「たぶん、習性でしょうね。この海洋生物については、大昔から海で人間を助けた、という話が世界の沿岸地の伝説となっています」

「だからアメリカの場合も今回も、溺死しようとする人間を救助しようとしたのかもしれませんが」

「関口は海洋生物の弁護をした」

「そして亜季がなにかの理由で溺死しかけ、海洋生物が必死で助けようとして亜季を一晚中支えて泳いでいる姿を想像し、胸が締め付けられた。あの自我を持った海洋生物は悲しみもまた、関口健児と同じように深かったろうと」

「警察は、水中転落事故として事件を処理した」

「この海洋生物の処分に対し動物保護団体の抗議を恐れた水族館側は、この海洋生物をひそかに海に放した」

海底から一気に浮上し、海面に高く躍り上がった。

いままさに水平線に触れようとしている太陽が、海洋生物を空で抱きかかえた。

それから・自我に目覚めた海洋生物は、黄金色に輝いた海に、落下した。

完